

【禊】みそぎ

『古事記』に黄泉国から逃れてきた伊弉諾命(いざなぎのみこと)が禊(みそぎ)をして穢[ケガレ]を祓[ハラ]った話があります。これが日本最古の禊の記録です。

祓[ハラエ]と禊[みそぎ]は類義語で、祓は浄化全般を、禊は水の力による浄化をいうようです。したがって禊は祓の一種と捉えることができます。

ともに、災難・罪・穢れ・厄の浄化を目的とした儀礼ですが、用例を見ると祓は罪を、禊は穢れを浄化する場合が多いように見受けられます。

昔は陰暦六月と十二月の年2回、新たな季節を迎えるに当って祭りがありました。この内、六月の晦日を夏越の祓、あるいは水無月祓といいます。

夏越の祓には様々な方法がありますが、川や海での沐浴、すなわち禊が多かったようです。庶民の間では人のみではなく馬などの家畜も沐浴させていました。

日本人はもめ事の解決に際し「水に流す」という言葉で情緒的決着を図りますよね。広義にはこれも禊といえましょう。

ところで流された穢はどうなってしまうのでしょうか。そこまでは神話も神事も関知していないようです。近代に至り河川の汚染を容易に許してしまったのは流しっぱなしの習慣にも原因がありそうですね。

夏越の祓は禊だけではありません。

茅の輪という浅茅で大きな輪を作り、これを潜る茅の輪潜りも夏越の祓のひとつです。潜ることによる祓はなにやら茶の湯の世界にもありそうですね。

お近くの神社でご覧になったことはありませんか。茅の輪潜りは夏の疫病の祓を期待して現代でも多くの神社で6月から7月にかけて行われています。

この神事は「備後風土記逸文」にある素盞鳴尊(すさのおのみこと)の故事に由来するものです。素盞鳴尊が旅の途中宿を求めたところ、裕福な弟の巨旦将来(こたんしょうらい)は冷たく断り、貧しい兄の蘇民将来(そみんしょうらい)は暖かく迎え入れました。

翌朝出立の際、素盞鳴は茅の輪を護符として腰につけることを蘇民に教えました。その後、弟の家は疫病により滅びましたが、兄の家は災厄を逃れ栄えたということです。

この話を基に茅の輪潜りが始まったのです。

また、紙や板の札の護符に「蘇民将来子孫之門也」あるいは「蘇民将来子孫繁昌也」と書いて戸口に貼ったり、短冊状の幡に仕立てて棒に結び下げ、畑に立てて虫よけにする風習もあるようです。

江戸末期の蒔絵師中山胡民の作に<蘇民将来蒔絵中棗>があります。

黒塗の棗に「蘇民将来子孫之門也」と書かれた短冊状の幡を蒔絵したものです。

夏越しの時季、祇園祭の時季に相応しいですね。

禊を語る上で忘れてはならないものに賀茂祭があります。

賀茂祭は通称葵祭ともいいます。『源氏物語』の葵上と六条御息所の車争いはこの祭りの行列を見物するための場所取り合戦だったのです。

昔は陰暦四月の酉の日に行われましたが、現代は5月15日に行われる京都三大祭のひとつです。賀茂祭にあたり、陰暦四月午の日か未の日には斎院が賀茂神社付近を流れる御手洗川(賀茂川の支流)で禊をしたそうです。斎院とは賀茂神社に奉仕する未婚の皇女です。天皇即位に際し未婚の内親王をト占で一人選んだのだそうです。選ばれた斎院は御手洗川で禊を行い宮中で2年間の精進潔斎し、さらに禊を繰り返します。

・風そよぐ檜の小川の夕暮れは禊ぞ夏のしるしなりける 『壬二集』藤原家隆

昔、夏は病の恐怖や害虫の被害にさらされる時季であり、夏に対処する古人の心の様がこれらの神事に窺えます。

初夏の茶道具の取り合わせは、どこかに禊に因む道具を加えてみたいものです。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~